

いよいよ約束が極まって、もう立つという三日前に清を尋ねたら、北向の三畳に風邪を引いて寐ていた。おれの来たのを見て起き直るが早いか、坊っちゃん何時家を御持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いて来ると思っている。

そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよ馬鹿氣ている。おれは単簡に当分うちは持たない。田舎へ行くんだといったら、非常に失望した容子で、胡麻塩の鬢の乱れを頻りに撫でた。余り氣の毒だから「行く事は行くがじき帰る。来年の夏休にはきつと帰る」と慰めてやった。それでも妙な顔をしているから「何を見やげに買って来てやろう、何が欲しい」と聞いて見たら「越後の笹飴が食べたい」といった。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方角が違う。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」といって聞かしたら「そんなら、どっちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」というと「箱根のさきですか手前ですか」と問う。随分持てあました。

出立の日には朝から来て、色々世話をやいた。来る途中小間物屋で買って来た齒磨と楊子と手拭をズツクの革鞆に入れてくれた。そんな物は入らないといってもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔を昵と見て「もう御別れになるかも知れません。随分御機嫌よう」と小さな声でいった。目に涙が一杯たまっている。おれは泣かなかった。しかしもう少しで泣く所であった。

汽車がよつほど動き出してから、もう大丈夫だろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。何だか大変小さく見えた。